

## 日中同形語の語義相違の一要因：古義の残留問題について

張，潔卉  
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/2560351>

---

出版情報：地球社会統合科学研究. 12, pp.11-19, 2020-02-25. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



# 日中同形語の語義相違の一要因 —古義の残留問題について—

チョウ  
張

ケツ キ  
潔 卉

## 要旨

日中同形語の語義相違をもたらす要因の一つとして、日本語の古代漢語<sup>1)</sup>の古義の残留現象がしばしば場合指摘されている。しかし、この現象がどのように生じたのか、どのような要素がそれに影響を与えたのか、それらの点について、一步進んで探究する必要がある。本稿では主に、中国語語彙の歴史的発展と意味変化に着目し、複音節語化、偏義複合語、接辞化、意味特化という四つの意味変化をもたらす要素に重点を置き、具体的な語例分析によって、中国語語彙の発展変化が日中同形語の意味変化にもたらされた影響を垣間見ることにする。

キーワード：日中同形語、古義の残留、複音節語化、偏義複合語、接辞化、意味特化

## 1. はじめに

日中同形語の語義相違をもたらす要因の一つとして、日本語の古代漢語の古義の残留現象がしばしば指摘される。(何宝年2012、王蜀豫1996、呉侃1999など) すなわち、両国語彙交流の歴史の中で、一部の語彙は日本に伝来した後、元来の中国語においては何らかの意味変化が起こり、古義が使用されなくなり、新義が生じた。結果として、それが現在の両言語において、字形が近似しているながら、意味が異なる同形語が生み出された一つの原因になっている。しかし、この現象に関する研究の多くはこの現象の指摘と語例の列举にとどまっている。このような現象がどのように生じたか、どのような要素がそれに影響を与えたのか、その意味変化に規則性があるかどうか、それらの点について、一步進んで探究する必要がある。

「古義の残留」という概念は日本語のほうに視点を置く概念であり、日本語における「古義の残留」は換言すれば、中国語のほうに何らかの意味の変化が起こり、古代漢語と現代語との間にずれが生じたということである。よって、中国語語彙の歴史的発展変化の過程についての探究がこの問題を解決する手がかりになる。ここで

は複音節語化、偏義複合語と接辞化問題、また、意味の特化も考慮に入れて、分析を進めていくことにする。

## 2. 調査方法

まず《古今同形异义词语词典》から古今同形異義の語を見つけだし、それらの語を「日中同形異義語1500」、「日中同形異義語辞典」と照らし合わせ、古代漢語の古義の残留によってできた日中同形語をみつけ、これらの語を《汉语大辞典》、《现代汉语词典》と「日本国語大辞典」を使用し、それぞれ、古代漢語、現代中国語<sup>2)</sup>と現代日本語における意味を確認し、各辞書の語彙項目と「中国基本古籍庫」<sup>iii)</sup>と「文渊阁四库全书」<sup>iv)</sup>のデータベースを参考にし、各意味項目の初出例を調べ、意味変化に対する分析は部分的に董志翹、張意馨(1992)編著の《古今同形异义词语词典》と王力の《古汉语字典》を参照した。意味特化について、特に、基本義とのイメージのずれが大きい場合はCCLコーパスを利用し、特化した意味の使用頻度を確認した。

また借用時期の問題との関連を考慮に入れ、各意味項目に関する例文は《辞源》と前述の二つのデータベースを参考し、基本的に《辞源》に記述された最初の用例を使用し、前述した二つのデータベースにそれ以前の用例が見いだせれば、それを使用することにする。

## 3. 複音節語化の影響

周知のとおり、漢字は表語文字であり、上古漢語では基本的に一音節に一字、そして一つの意味を対応させた単音節制と呼ばれる語彙体制であったが、時代と共に語彙の主体が徐々に一音節語から複音節語<sup>v)</sup>に移行する傾向が見られる。王力、他(1980)では複音節語化と呼ばれる現象である。複音節語は殷商の甲骨文や金文においてはすでに出現した(杜航2018)。先秦時代はその萌芽期であり、中古時代にはその数が増え続け、唐代にはかなり豊富な語彙量に達し、アヘン戦争後には中国語語彙において圧倒的優勢を獲得した(王力、他1980)。早期

の文献についての統計を見れば、例えば《左传》（春秋時代、約20万字）と《论衡》（後漢時代、約21万字）を比べると、前者の複音節語は284語であり、後者は2300語にも達している（陳克炯1978、程湘清1985）。

王力、他（1980）によると、歴史上、中国語語彙の複音節語形成について以下三つの傾向が見られる：

- （1）联绵字（複数の音節で一つの意味を表し、一つの語を形成するもの、以下連綿語と呼ぶ）
- （2）词根加词头词尾（接頭辞+語根、語根+接尾辞）
- （3）仿語的凝固化（もともとフレーズだったものが語彙化し、熟語になること）である。

統語関係のある複音節語について、最初は単音節制の影響を受け、それを構成する一字一字の意味を足し合わせた意味の集合、フレーズとして理解されていた場合が多かった。このような組み合わせは不安定で、二字それぞれ単独で用られる場合もあれば、字の間にほかの語やフレーズが出現する場合もある。使用頻度が増えるにつれ、徐々に安定し、語全体で一つの定着した基本義を持つ熟語となる。

現代中国語の複音節語は古代漢語に比べ、結合の自由度が低減し、明確な固定された基本義を持つものが多い。新しく造語されたものもあれば、古代漢語の複音節語をそのまま引き継ぐものもあり、古代漢語の複音節語の構造や意味を変化させたものもある。

一方、現代日本語では並列複音節語の二つの形態素の足し合わせの意味をそのまま維持している語がある。それが日中現代語においての同形異義語が生み出される一つの原因になっている。

例えば「顔色」という語について、古代漢語における「顔色」の意味は主に

（1）. 顔の表面の色、容貌。《管子》（春秋戦国）に「金心在中不可匿、外见于形容可知于顔色。（金の心は人の中にあり、隠すことができない。その者の顔や容貌から見て知ることができる。）」とある。

（2）. 顔つき、表情。《论语・泰伯》（春秋戦国）に「正顔色、斯近信矣。（顔つきを整えることによって、他人から信用される人に近づく。）」とある。

《说文解字》に「顔、眉間也。（顔、すなわち眉間のことである。）」とあり、人間の表情が最も現われやすい部分を指すため、「顔の色」、「表情」という意が生まれた。《汉语大词典》によると、「色」も「顔の色」、「表情」の意味項目がある。「顔」と「色」、二つの類似の意味を持つ単音節語が一つの複音節語を形成した。最初の用例の時期から見ると、春秋戦国時代にはもう二字連続して使用されていた。「顔色」はまた人の容貌という意味から、容貌の美しい人をも指すようになった。《辞源》によると、

「顔色」の現代中国語における「色、色彩」の意味は唐代、杜甫の《杜工部草堂詩箋・花底》の「深知好顔色、莫作委泥沙。（（花の）好き色を深く知り、泥沙に（身を）委ねること莫れ）」が初出例である。董志翹、張意馨（1992）は「色、色彩」の意味は「顔」のほうの意味が弱くなって生じたと指摘した。語構成について、最初は二つの類似の意味を持つ形態素が並列してその足し合わせた意味を語義としていたが、その後一字の意味が脱落し、残った一字の意味も変わり、「顔色」という語に新たな「色、色彩」の意味が生まれ、現代中国語はその意味のみを受け継いだ。

一方、現代日本語の「顔色」の「顔の色あい。血色」と「感情の動きの表われた顔の様子。かおつき。かおばせ。」（日本国語大辞典より、以下同）の二つの意味は古代漢語に近似し、現代中国語の特化された「色彩」の意味はない。

#### 4. 偏義複合語の影響

複音節語において、一種の特殊な語彙—偏義複合語<sup>vii</sup>があり、それについて、黎錦熙（1930）は合成語において、並列関係にあるものが、そのうちの一字の意味を偏って使用し、他の共にある字の意味を取らないものを『偏義複合語』と呼ぶ」と定義した。王力（1999）も「古代漢語において、特に以下のような複音節語に注意を払うべきである。二つの類義或いは反義の単音節形態素で合成された複音節語のうち一つの単音節形態素の意味がその複音節語の意味となり、もう一つの単音節形態素はただの脇役である。…『偏義複詞』と呼ばれているものである」と指摘している。

偏義複合語が形成される因について杜梓純（2004）と章佳（2006）の観点をまとめると（1）. 二つの類義の単音節形態素を含む偏義複合語の形成については古代漢語の表現習慣、韻律の影響が大きい。二字、四字対偶や平仄を要求する文体に合わせるため、意味を表さない単音節形態素を付け加えるのが一つの原因であり、関連のある意味を持つ単音節形態素を並べて、雰囲気を作ろうとしたり、読者の注意を引こうとしたりするのも原因である。（2）. 二つの反義の単音節形態素を含む偏義複合語の形成については婉曲表現と深く関わる。プラスのイメージとマイナスのイメージを持つ形態素を並べることによって、語全体のマイナスのイメージを和らげようとするのが一つの理由である。もっとも、根本的に、偏義複合語の出現の前提は前述した複音節語の結合の自由度である。

興味深いことに、杜梓純（2004）によると言語資料において、すべての「偏義」で用いられる二音節の組み合

わせに対し、それらの「偏義」でない用法の用例が見つけられる。しかも、「偏義」でない用例のほうが時期が早く、使用頻度が高い。それは、二つの単音節形態素が複音節語を形成する当初はそれぞれの意味を持っている並列関係であるが、その後一つがその意味を失い、偏義複合語が形成されるという発展の過程があるということの意味する。

古代漢語における偏義複合語は不安定で、二つの類義或いは反義の単音節形態素で合成された並列式の複音節語の場合、二つの単音節形態素の足し合わせの意味を取るか、そのうちの一つの意味をとるか、換言すれば、ただの並列複音節語であるか、偏義複合語であるかは文脈で判断するしかないと常に指摘されている。現代中国語における偏義複合語は複音節語の語彙化が進むにつれ、意味が安定し、二つの形態素のうち一つの意味が定着した。

一方、現代日本語では並列複音節語の二つの形態素の足し合わせの意味をそのまま維持し、偏義現象が起らなかった語がある。それが日中現代語における同形異義語が生み出される一つの原因になっている。

「辞去」もまたその一例で、古代漢語における「辞去」の意味は主に

(1). 別れを告げて、去る。《史记・梁孝王世家》(前漢)に「後二日, 复入小见, 辞去。(その二日後、もう一度短い面会をし、別れを告げて去った。)」とある。

(2). 世を去る。死ぬの隠語。元・関漢卿の《玉鏡台》第一折に「老生姓温, 夫主姓刘, 早年辞去, 别无男儿。(私の姓は温であり、夫の姓は劉である。早くも夫に先たたれ、子には男の子は一人もない。)」とある。

例文から見られるように、「辞去」は古代漢語において、「辞」と「去」は前後に発生する二つの動作、「別れを告げる」と「去る」が並列する複合動詞として認識され、「別れを告げてから去る」が基本義になっている。最初の用例が出現した時期から見ると、前者の意味項目が前漢、後者の意味項目が元の時代にはすでに使用されていた。現代中国語では、「辞去」は固定した「断る、やめる」という意味をもつ動詞になっている。「辞去」が一つの動詞として、目的語をつける用法の用例は明清以前には見当たらない。古代漢語の用例を見ると、「辞去」と共起する事柄は官職や任務などが多く、現代中国語の「仕事や任務を断る、やめる」の用法はそれと関連があるかもしれない。「去」の意味が薄れて、「辞」の「断る、やめる」の意を中心に新たな意味が定着した。並列の複音節語から、偏義複合語に移行した語彙に属すると考えられる。

それに対し、現代日本語では「辞去」は「別れのこと

ばを述べて立ち去ること。いとまごい。辞訣。辞別。」の意で、古代漢語の(1)の意味とほぼ一致する。

## 5. 接辞化の影響

中国語語彙の歴史的発展変化のもうひとつの特徴として、接辞化<sup>10)</sup>という現象がある。もともと独立した意味を持つ内容語が意味を失い、機能語の接辞になる。Meillet (1958) が述べた文法化の概念 - 「自立語に文法的性質を付け加えること」の一種の表れである。ここではより狭義的にその現象を接辞化と呼ぶことにする。

接辞化も複音節語化の一種である。趙克誠 (1987) によると、漢代以降、名詞の接辞が徐々に形成された、その根源となるものは上古漢語の名詞、形容詞の語意の抽象化にある。複音節語化と比べ、接辞化は造語力的にかなり劣る。《论衡》(後漢時代)において、接辞化により造語された語数は63であり、二字語総数の2.74%を占め、《世说新语》(南北朝時期)ではその語数は98と二字語総数の4.6%を占めている(陳克炯1978、程湘清1985)。一般的に見られる接辞化現象と関連する接辞の例として、文言体系の「有」、「載」、「言」、「然」、「乎」、「焉」、白話体系の「老」、「子」、「儿」、「阿」、「自」、「复」がその代表である(蒋信, 蒋宗许2009)。

もとの内容語がその意味を失い、ほかの独立形態素と結びついて新たな意味を獲得する。その新たな意味が結ばれた形態素の意味になる場合もあれば、ほかの特化した意味を持つ場合もある。

一方、日本語の同形語ではその現象が起らなかった。もとの内容語の意味がそのまま残っており、その語は派生語ではなく、複合語として解釈され、同形の中国語と意味上の差異が形成された。

接尾辞の「子」について、《说文解字》に「子, 婴儿(子、嬰兒のことである。)', 《释名・形体》に「瞳子, 子, 小称也。(瞳子(ひとみ)、子、小さいものに対する呼称である。)」とある。石鈺 (1999) は睡虎地秦墓の竹簡において、すでに接尾辞としての「子」が出現したと指摘した。趙克誠 (1987) は接尾辞の「子」が名詞の「子」(小さいものに対する呼称) から抽象化して形成し、漢代以降使用し始めたと述べた。太田辰夫 (1957) が「(「子」は) 名詞の接尾辞中一番早く発達した。いくつかの用法があるうちで、人間を表す名詞に付加する用法が最も古い。」と指摘した。王力、他 (1980) は唐代以前の用法を①人を表す②動物名の後につく③器物の名称の後につくとまとめた。

「妻子」を一つの例としてあげる。古代漢語における「妻子」の意味は主に

(1). 妻と子。《孟子・梁惠王上》(戦国)に「是故明君制民之产、必使仰足以事父母、俯足以畜妻子。(故に名君たる者は、必ず民の財産を上(に)父母を奉仕し、下(に)妻と子を養うに足るようにすべきである。)」とある。

(2). 妻。《詩・小雅・常棣》(春秋)に「妻子好合、如鼓瑟琴。(妻と仲が睦まじいこと、瑟と琴を奏でるがごとし。)」とある。

意味項目の最初の使用時期が春秋戦国時代から見ると、「妻子」の「子」がもとの「子供」の意味が脱落し、接辞化する時期はかなり早い。古代漢語では(1)と(2)の意味がともに使用されていた時期が長く、「子」が接尾辞であるかどうか判断しにくい場合もある。一方、現代中国語において、妻の意だけが定着し、「妻」と「子供」の両方を指す用法は完全になくなっている。

それに対し、現代日本語の「妻子」は「妻」と「子供」を指す場合がほとんどで、「子」の接辞化の影響を受けていないようである。

接頭辞の「老」について、《说文解字》に「老、考也。七十曰老。(老、考である。七十歳になったことを老と言う。)」とある。趙克誠(1987)はそれが、年寄りや年長者を表す形容詞「老」から抽象して形成し、漢代以降から接辞としての用例が見られると指摘した。孫常叙(1957)によると、六朝時代にはすでに接頭辞化する傾向が見られ、唐代にその用法が普及した。また、「(「老」は)名詞の接頭辞で、姓名、称呼に用いられるほか、若干の動物を表す名詞にも用いる。」と太田辰夫(1957)が指摘した。

呼称として使われる例として、「老婆」があり、古代漢語における「老婆」の意味は主に

(1). 年配の女性に対する他称詞。唐・顧況の《华阳集》に「八十老婆拍手笑、妒他织女嫁牽牛(八十歳の老婆が手をたたいて笑い、織姫が彦星に嫁いだことを妬む。)」とある。

(2). 年配の女性の自称詞。《洪氏集驗方》(宋代)に「一日有药姬过之、曰：老婆能治此眼…(ある日、薬売りの老婆が通り、このように言った。「私はこの目を治すことができる…。)」とある。

(3). 妻の俗称。宋・呉自牧の《梦梁录・夜市》に「更有叫、“时运来时、买庄田、取老婆”卖卦者。(さらに、このように卦の呼び込みをしている人もいる。「時運が来る時、莊園や田畑を買い、妻を娶ろう」と。)」とある。

(4). 年配の侍女に対する呼称。《红楼梦》に「丫头老婆们不好、也只管告诉我。(侍女やママたちが気に触ったら、それも私に言ってください。)」とある。

「老婆」の唐代の用例から見ると、(1)の意味と仏教関連の「老婆禅、老婆心(老婆のように細かく、飽きな

く仏法を説く)」で使用される場合が多い。時代の変化につれて、「老」のもとの意味「年を取った」という意味が脱落し、「老婆」が「妻」を指すようになった。その意味で使われる用例は少なく、稀に宋、元の用例はあるが、その時期に一般的に使用されていたとはいいがたい。俗語という文体の理由で、文献記録に残りにくいかもしれないということを考慮に入れると、これ以前にも使用されていた可能性は否定できない。現代中国語では、「老婆」は完全に「妻」の意に特化し、それに対し、現代日本語の「老婆」は「年とった女性。老嫗。老女。おうな。ばば。」という意で、古代漢語の(1)の意に限定される。

## 6. 意味特化の影響

古代漢語の意味発展の過程においては時として、意味範囲の縮小や特化された派生義が生み出される現象もある。それによって、古代漢語の基本義、またはそれと緊密に関連する派生義しか残されていない日本語の同形語との意味の相違が生じた。

「感激」はその一例で、古代漢語における「感激」の意味は主に

(1). 触発され、発奮する。《三国志・魏志・崔琰传》に(晋代)「年二十三、乡移为正、始感激、读《论语》、《韩诗》。((崔琰)二十三歳に、学校を移して正しい道を歩み、発奮し始め、「論語」、「韓詩」を読む。))とある。

(2). 活力があり、生氣がある様子。唐・杜甫の《观孙大娘弟子舞剑器行》の序に「(張旭)自此草书长进、豪荡感激。((張旭の)草書はこの後進歩し、豪気を帯びて、活気に満ちている。))とある。

(3). 激怒、憤慨。《三国志・魏志》(晋代)「(刘仲始)…一为市吏所辱、乃感激、踏其尺、折之。(劉仲始が)…市の小役人に侮辱されて憤慨し、その尺を踏みつけて、折った。))とある。

(4). 感謝する。《三国志・诸葛亮传》(晋代)卷三十五に「臣不胜受恩感激。(臣はそのご恩を受け深く感謝いたす。))とある。

「感激」は元来、何かを感じてから、それによって何らかの感情が触発されたという意味であり、「感」と「激」が前後に発生する二つの動作を表す複合動詞として理解されていた。触発された感情は発奮の気持ちであったり、憤慨の気持ちであったり、感謝の気持ちであったりし、それぞれを派生義として発展した。各意味項目の最初の用例から見ると、(1)、(3)と(4)の意味項目の出現時期は晋代、(2)は唐代であるが、時代の変化につれて、「感謝する」という意に固定され、現代中国語の「感

激」の意味―「他人の好意や援助に対して、感謝する気持ちを表す」に至った（董志翹、張意馨 1992）。古代漢語の例文から「感激」と共起する事柄を見てみると、「感激」の結果が涙を流したり、病を煩わせたり、死に至ったりすることであり、かなり強い情緒を形容する表現であった。古代漢語では（1）と（3）の意味が優勢であったが、現代中国語では「感謝」の意だけが残っている。これはもとの「感じて、触発される」多くの感情を表すという範囲から、そのうちの1つの「感謝」という感情を表すのに縮小した。意味の特化現象が見られる。

一方、現代日本語の「感激」は「物事に深く感じてふるいたつこと。心に強く感じること。感奮。また、非常に有難く思い感謝すること。」であり、古代漢語の「感激」の基本義「何かを感じて、それに触発されて、何らかの気持ちが生じた」と意味的には極めて近似している。

#### 「敷衍」

古代漢語において「敷衍」の意味は主に

（1）. 押し広げる、伝播する。《文選・張衡〈西京賦〉》（後漢）に「篠簜敷衍、編町成篁。（細い笹と大きな竹が押し広がり、田畑の間に立ち並び、連綿とした竹林が形成した。）」とある。

（2）. 押し広げて陳述する。《朱子語類》（宋代）卷七十八に「掇拾安石緒余，敷衍而潤飾之，今乃謂其言无一不与圣人契，此岂不厚诬圣人，疑誤學者？（王安石の言論を部分的に拾い、それを押し広げて誇張し、今は彼の言論と聖人の教えとすべて合致していると言う。これは聖人をひどく誹謗し、学問をする者を疑わせ、迷わせることではなかろうか？）」

（3）. 見た目だけ何とかしてごまかす。いい加減にあしらう。《旧京遺事》（明代）に「然率潦草具文，敷衍如戏。（しかし、書かれた文章は雑で、いい加減で、まるで戯れているようである。）」とある。

（4）. 何とかして、無理やりやり過ごす。《官场现形记》（清代）第五十四回に「…敷衍一日算一日，搪塞一朝算一朝。（…その場しのぎでやり過ごす。）」とある。

《说文解字》に「敷、施也（敷、すなわち施である）」、「衍、水朝宗于海（衍、水は海に向かって帰る。）」とあり、王力の《古汉语字典》において、《说文解字》の解説を受け、「敷」を「布」とし、広げる、拡散させると解し、「衍」を蔓延、伝播の意味と解した。古代漢語における「敷衍」は「敷」と「衍」、広げる、蔓延するという類似の意味を持つ動詞でできた複合動詞として成立していた。各意味項目の最初の使用例を見ると、（1）が後漢で、（2）が宋代であり、「押し広げる」という意味が「敷衍」の早期と中期の古代漢語における基本義と考えられる。用例数からみると（2）の意味が最も多く使われて

いた。董志翹、張意馨（1992）によると、「敷衍」は「敷演」と通じ、「押し広げて陳述する」意味と「演じる」という意味があり、演じること、芝居との関わりから、さらに（3）、（4）の見た目だけ何とかしてごまかす、適当にあしらう、何とかしてやり過ごすという意味に発展した。（3）、（4）の意味に関する用例がほぼ明清のものから見れば、意味の変化は時期的にそう早くないことが窺われる。現代中国語では、（2）の意味も稀に使用されるが、特化した（3）、（4）の意味が強く、基本義として定着している。

それに対し、現代日本語における「敷衍」は（1）. のべひろげること。（2）. 意義をおしひろめること。言葉を加えて、詳しく説明することという意味に留まり、古代漢語の（1）と（2）の意味とほぼ一致し、（3）や（4）のような特化された意味はない。

意味の特化において、とくに、元来中性的、積極的なイメージを持つ語がマイナスのイメージに変わった語は特に日本語の同形語との意味のずれが大きい。以下、例を挙げて説明することにする。

#### 「風流」

古代漢語における「風流」の意味はかなり多く、「汉语大词典」だけでも14の項目があり、いくつか近似する意味をまとめて整理すると、主に、以下の6項目に分けられる：

（1）. 風の流れ、風の流れに乗じて伝播すること。漢・蘇順の《和帝誄》に「陶元二化，風流万国。（礼、樂の教えは万国に広がる）」とある。

（2）. 風習。先人の残した遺風。《汉书》（後漢）に「今之歌謡慷慨風流尤存耳。」（今（この地の）歌謡は慷慨として、その遺風が残されている。）とある。

（3）. 文学作品などが優れていることを形容する。唐・司空図の《二十四诗品含蓄》に「不著一字，尽得風流（このことについての描写は一字もなかったが、そのことのすばらしさが伝わる）」とある。

（4）. 風雅なこと。人が風雅に耽ること、性格が自由奔放で屈託がないようす、またはそのような人を形容する。《世说新語・品藻》（南朝）「…然門庭蕭寂，居然有名士風流，殷（殷中堪）不及韓（韓康伯）。（…しかし、静かに暮らし、明らかに屈託のない名士の気質がある。（この点について）殷中堪は韓康伯に及ばない。）」とある。

（5）. 容貌が美しい人。才能がある人。優れた人物。《世说新語・賞誉》（南朝）に「范豫章謂王荊州：「卿風流備望，真后来之秀。」（范豫章は王荊州にこう言った。『あなたはよい気質を持ち、容姿端麗で、名望のある真に優れた新進である。』）」とある。

（6）. 浮ついた態度、男女の情愛について慎みのない

ようす。《玉管照神局》(南唐)に「…平生多是愛風流, 綺羅丛里貪懽乐, 红日三竿未举头。(…平素、色事を愛する。綺羅(女性)の叢に快樂を貪り、日がかなり高く上っても、頭を上げない(起きていない)」とある。

「風流」はもともと「風」が「流れる」と「風習」が「流行」する、という二つの基本義を持ち、「N+V」主述関係の名詞として捉えられていた。その二つの意味項目の最初の使用時期が漢代から見ると、基本義かなり早い時期から使用されていたことが分かる。やがて、士大夫たちが雅を愛し、屈託がなく、自由奔放な生き方を好むので、そのような生き方がその時代の「風習」となり、そのような生き方やそうする人が「風流」で形容されるようになった。時代の変化につれて、墮落した士大夫が道楽や色事に耽る様子が目立ち、「風流」の意もそれによってだんだんマイナスのほうに傾き、男女の關係に不謹慎であるという意味に変わっていった。早期の用例は南唐や宋の古い書で極稀に見られるだけで、この後徐々に増えていった。現代中国語において、CCLコーパスに、「風流」に関する2555の例文のうち、510例を無作為に取り出し、分析した結果、234の例文(無効データを除けば、半分近く)が(5)の意味で用いられている。残りの例文では主に(1)と(4)の意味で使われ、古代漢語風の文体において使用される場合が多い。(5)の意味は現代中国語において主流な意味の一つと言ってよい。

一方、現代日本語では「風流」について(2)と(4)の意味が残り、特に上品な趣があることと詩歌、書画などの雅な趣味に耽ることが主であり、マイナスのイメージを持つ特化された意味はない。

「下流」も類似の例の一つであり、10の意味項目をまとめ、分類すると、以下のようになる。

(1). 水、河の流れていく様子。また、流れていくところ、河口の付近を指す。《荀子》(戦国)に「其源足以濫觴及其至江之津也…非惟下流水多邪?(その源流は川口まで氾濫するに足る…これはただその下へ流れる水が多いためではないでしょうか?)」とある。

(2). 末流。血筋の末、流派の末。《三国志・魏志・乐陵王茂传》(晋代)に「今封茂为聊城王, 以慰皇太后下流之念。(今日、茂を聊城の王に任命し、皇太后のご後継への心配を和らげる。)」とある。

(3). すべての悪が帰する所。《论语・子张》(春秋戦国)に「是以君子恶居下流、天下之恶皆归焉。(ゆえに、君子は下にいることを嫌う。天下すべての悪がそこに帰するのである。)」とある。

(4). 劣等なもの。低い地位、地位の低い人。《论衡》(漢代)に「或高才洁行, 不遇, 退在下流。(或いはすばらしい才能と清らかな品行を持ちながら、出世の機会

に恵まれず、退いて下層にいる。)」とある。

(5). 卑しい、下賤な。《儒林外史》(清代)に「你长成人了, 怎么学出这般一个下流气质。(大人になってから、どのように学んで、このような卑しい氣質を身につけたのか?)」とある。

「下流」はもともと「下へ流れる」として解釈され、「V+V」複合動詞として捉えられ、名詞化して「流れるその先」という意味でも使用されている。「下へ流れる」ことから中性的な「末流」の意味へと転じ、また、下へ流れることは低い方向に進むことであるため、「低い地位、地位の低い人」へも転じた。さらに、低い方向はよくない方向を意味し、「すべての悪が帰る所」という意になり、《辞源》によるとそこから人の品行が「卑しい、卑劣である」という派生義が生まれた。また現代中国語では、「色情的な」という意味が生じ、CCLコーパスにおいて、「下流」に関する1788の例文のうち、303の例文を無作為に取り出し、分析した結果、この意味で使われる例文は252あり、ほとんどこの意味で使われていると言える。

一方、現代日本語では、「下流」は「川の流れの下(しも)の方。河口に近い方の流れ。川下。」と「下等の地位。低い位置・立場。また、社会的地位や経済力などの劣った階級。下層階級。」という意で使われ、古代漢語の(1)と(4)の意味と近似していて、特化された「卑しい、卑劣な」「色情的な」などの意味はもっていない。

## 7. おわりに

このように、日中同形語の語義相違をもたらす要因の一つとしての古義の残留現象について、中国語語彙の発展の歴史的視点から、複音節語化、偏義複合語、接辞化、そして意味の特化という四つの意味変化をもたらす要素を取りあげて、分析を行ったが、残された課題はまだ多数ある。

古代漢語と日本語については漢語の借用とその時期の問題が想起されやすい。実際、古義の残留現象のある同形語において、日本語の残された古代漢語の意味がどの時期のものであるかを特定することによって、その語の伝来の時期を推測することも可能ではないかという考えもある。

しかし、借用時期の問題はそう単純ではない。実際、各時期の文献を見ると新たな意味が生まれても、前の意味は消えることなく、古代の作品の注釈書のみならず、一般の文学作品にもしばしば使われている。よって、問題となる語が日本に伝わった時期を特定するには両国交流の文献学上の証拠が必要だと思われる。ただ、中国語

において新義が生まれ、日本語ではその意味がない場合は新義が生まれる前にはすでに借用が終わっている可能性が大きいので、日本語に残された意味が古代漢語のどの時代までものかということを明らかにすることは、借用時期の判断するための1つの手がかりになると思われる。

## 参考文献

論文、著作：

1. 太田辰夫. 中国語歴史文法 [M]. 朋友書店 .1957
2. ローレル・J・ブリントン / エリザベス・C・ドラウゴット「著」日野資成「訳」語彙化と言語変化 [M]. 九州大学出版会 .2009
3. 杜航. 秦汉以前汉语复音词研究综述 [J]. 辽东学院学报 VOL.20 No. 1 .2018
4. 杜梓純. 论“偏义复词” [J]. 古汉语研究 VOL.64.2004
5. 郭作飛. 从历时平面看词缀演化的一般规律 [J]. 西北农林科技大学学报 VOL.5 No. 1 .2005
6. 何宝年. 中日同形词研究 [M]. 东南大学出版社 .2012
7. 蒋信, 蒋宗许. 汉语词缀的衍生机制和前缀后缀的异同 [J]. 绵阳师范学院学报 VOL.28 No.7 2009
8. 李金平. 论汉语复音词的衍生方式 [J]. 技术与教育 VOL.21 No.2. 2007
9. 沈国威. 近代日中語彙交流史 [J]. 笠間書院 . 1993
10. 孫常叙. 漢語詞彙 [M]. 吉林人民出版社 . 1957
11. 王力. 汉语史稿 [M]. 中华书局 .1980
12. 王力. 古代汉语 [M]. 中华书局 .1999
13. 王蜀豫. 日中両国語における同形異義語についての対照的研究—意味の完全に異なる語を中心に [J]. 『現代社会文化研究』 No.4.1996
14. 呉侃. 日語词汇研究 [M]. 上海外语教育出版社 .1999
15. 章佳. 论偏义复词 [J]. 语文学刊 2006 年第 4 期 .2006
16. 張潔卉. 日中同形異義語の喚情価値の差異について—日本語がプラス、中国語がマイナスのイメージを持つ同形語 [J]. 地球社会統合科学研究 第 7 号. 2017
17. 趙克誠. 近代汉语语法 [M]. 陕西师范大学出版社 .1987
18. 周法高. 中國古代語法・構詞編 [M]. 中央研究院歷史語言研究所專刊之三十九 .1959

辞典：

1. 『日本国語大辞典』小学館国語辞典編集部編集 小学館 2006
2. 『日中同形異義語 1500』郭明輝、磯辺祐子、谷内美江子編 国際語学社 2014
3. 『日中同形異義語辞典』王永全、許昌福、小玉新次郎編著 東方書店 2007
4. 《古今同形异义词语词典》董志翘、張意馨編 江苏科学技术出版社 1992
5. 《汉语大词典》罗竹风編 汉语大词典编辑委员会 汉语大词典编纂处编纂 汉语大词典出版社 2001 第 2 版
6. 《辞源》何九盈、王宁、董琨編 商务印书馆 2015

## 第3版

## 7. 《现代汉语词典》 商务印书馆 2012.6 第6版

コーパス：

1. 北京爱如生数字化技术研究中心「中国基本古籍库」
2. 北京大学中国语言研究中心语料库 (CCL)
3. 「文渊阁四库全书」データー版

<sup>i</sup> 注1：本稿における「古代漢語」とは現代中国における漢語と対照するために立てた概念で、いわゆる上古漢語、中世漢語、近世漢語、近代漢語の全般を含む。

<sup>ii</sup> 注2：「中国語」は学術用語として、漢語と呼ぶべきであるが、日本における漢語と中国における漢語を区別するために、ここでは便利上「現代中国語」という用語を使う。

「中国基本古籍庫」は上古時代から民国（約11世紀（BC）-20世紀初頭）歴代書籍1万種、計17万卷、18億字、版本12700版、古書コピー1000万ページ、約400Gのデータを収集した膨大なデーターベースであり、中国の歴史、文化に関する古書が多く含まれ、最もデーター量が多い中国語データーベースであり、史上最大の歴代書籍のまとめである。

<sup>iii</sup> 注3：「中国基本古籍庫」は上古時代から民国（約11世紀（BC）-20世紀初頭）歴代書籍1万種、計17万卷、18億字、版本12700版、古書コピー1000万ページ、約400Gのデータを収集した膨大なデーターベースであり、中国の歴史、文化に関する古書が多く含まれ、最もデーター量が多い中国語データーベースであり、史上最大の歴代書籍のまとめである。

<sup>iv</sup> 注4：「文淵閣四庫全書」は紫禁城の文淵閣に所蔵された「四庫全書」の版本をもとにデジタル化して作られたデーターベースである。「四庫全書」は清の乾隆帝の時期に朝廷の監修によって編集された大規模の百科叢書である。上古時代から清前期（約11世紀（BC）-17世紀AD（中旬））の歴代書籍を3460余種、7.9万卷、3.6万冊、約8億字収録された膨大な作品である。

<sup>v</sup> 注5：《汉语大词典》と《辞源》の初出例の記述をベースに、「中国基本古籍庫」と「文淵閣四庫全書」データーベースでそれより早い時期の例を見つければ、それを初出例として挙げる。文献収容上の制限で本当の初出例ではな

い可能性もある。

<sup>vi</sup> 注6：王力、他（1980）は漢語の二音節以上で二つの形態素を一つの意味単位とする語彙のことを「复音词」、複音節語が語彙の主体となる現象を「复音词化」、周法高（1959）は「複词」、「複词化」と呼び、ここでは「複音節語」と「複音節語化」と呼ぶ。

<sup>vii</sup> 注7：黎錦熙（1930）は二つの類義或いは反義の形態素で構成され、そのうちの一つの形態素を語全体の意味とする語彙のことを「复词偏义」、王力、他（1999）は「偏义复词」と呼び、または「偏义复举」と呼ばれている。ここでは「偏義複合語」と呼ぶ。

<sup>viii</sup> 注8：王力、他（1980）は接辞のことを「词头词尾」、周法高（1959）は「附加语」、蒋信、蒋宗许（2009）は「词缀」と呼ぶ。本稿では、一般言語学の慣習に従い、「接辞」という用語を使う。

# A Factor of the differences in the meaning of Japanese and Chinese Homographs: Ancient Chinese Meanings Remaining in Japanese

Zhang Jiehui

As one of the reasons of the differences in the meaning between Japanese and Chinese homographs, the retained ancient Chinese meanings in Japanese have always been mentioned. However, how did this phenomenon happen, which factors are influential to the phenomenon, and what can we find in this procedure? These problems still need to be solved. This thesis will focus on the historical development of the meaning of the Chinese vocabulary, the existence of disyllabic words, partial semantic copying words, affixation and the specification of the meanings. The aim is to discover the influence of the semantic development of Chinese vocabulary made upon to the differences in the meaning of Japanese and Chinese homographs.

Key words: Japanese and Chinese homographs, retained ancient Chinese meaning, disyllabic words, partial semantic copying words, affixation, specification of the meanings